

令和3年度 校内研究計画

小平第二小学校 研究推進部

1 研究主題

「思考力・判断力・表現力の基盤となる言語能力の育成」

～国語科を中心とした言語活動の充実～

2 研究主題設定の理由

①今日的課題

近年、グローバル化や人工知能（AI）などの技術革新が急速に進み、10年前では考えられなかったような激しい変化が起きており、今後も予測困難な時代となってきている。「今後10～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い」、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に彼らが小学生の頃には存在していなかった職業に就くだろう」などと述べる研究者もいる。また、少子高齢化や地域・家庭等の環境の変化、多様な文化や価値観をもつ人との共存など、複雑化する諸課題への対応も必要となってきている。このように社会の変化が激しく、未来の予測が困難な時代の中で、児童には、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められている。

②新学習指導要領

①のような児童の「生きる力」を育むために、2020年度より新学習指導要領が実施されている。新学習指導要領では、教育課程全体や各教科などの学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力など」「学びに向かう力、人間性など」の3つの柱からなる「資質・能力」を総合的にバランスよく育てていくことを目指している。さらに、このような資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の視点から、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」を重視して、授業改善を図っていくことが求められている。様々な言語活動や協働的な学習活動等を通じて、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力や習慣の形成等を、効果的に育てていく必要がある。また、「外国語教育」や「プログラミング教育」などの新たな学びに加え、すべての学習の基盤となる「言語能力の育成」の充実を図っていく必要もある。教育課程全体を通じて言葉の力を育むことが求められている。

③学校教育目標と昨年度の研究から

本校の教育目標は「考える子：よく聞き、よく考え、よく判断し、自ら行動できる子ども」「思い

やりのある子：相手の立場や気持ちを考え、共に生きる豊かな心をもつ子ども」「やりぬく子：元気でたくましく、最後まで頑張る子ども」である。この児童像を具現化するために、昨年度は「共に学び合い、考えを深める児童の育成～『主体的・対話的で深い学び』の実践～」という研究主題のもと、考えを深める児童の育成に励んできた。指導者それぞれが教科を選択し授業実践を行ったことで、教科の特性を生かした指導法について学びを深めることができた。その反面、授業実践の教科が指導者によって違ったこと、教員全員で 1 つの授業を見る機会が設けられなかったことから、考えを深める児童の育成に向けての系統立てた指導等について課題が残った。

④児童の実態

令和3年度全国学力調査・学習状況調査（第6学年対象）の国語の正答率は、全国の正答率と比較すると1.3%ほど高くなっているものの、都の正答率との比較では2%ほど低くなっている。その中で「読むこと」の問題では、全国と都のどちらの正答率よりも低くなっているという結果が出ている。また、今年度の研究の第1段階であるホップ期にチームRが行った学力分析（第4学年、第5学年対象）では、言語（漢字や語彙）に関する問題や「読むこと」の問題で正答率が低くなっていることも分かっている。このことから、本校児童の国語力には課題があり、特に漢字や語彙などの「言葉の力」を育てていくこと、「読む能力」を高めていくことの必要性があると考え。さらに、チームRが行った国語の意識調査では、本校児童の約95%が「国語の学習は大切だ」と回答している。しかし、「国語の学習が好き」という設問では、学年が上がるにつれて「そう思わない」と回答する児童の割合が多くなっている。児童は、国語の学習の大切さは理解しているものの、学年が上がるにつれて国語の学習の難しさを感じたり、国語の学習に対して自信がもてなくなったりしているようである。この傾向を改善していくためには主体的・対話的な学習に取り組むとともに、児童が自信をもって国語の学習に臨めるように、学習の基盤となる言語能力の育成に力を注いでいく必要があると考える。

⑤指導者の思いや願い

③で述べたように、本校では昨年度「共に学び合い、考えを深める児童の育成～『主体的・対話的で深い学び』の実践～」という研究主題のもと、考えを深める児童の育成に励んできた。指導者各々が日々の授業の中で葛藤したり、創意工夫をしたりしてきたことで、主体的・対話的な深い学びを実現する授業づくりに向けての意識が向上した研究となった。今年度は、昨年度の研究の成果を生かしつつ、「教科を絞っても良かった」という意見も踏まえ、教科を「国語」に絞った新たな研究を進めていく。「考えを深める言語活動」「話す・聞く能力（伝え合う力）の育成（スピーチ、話し合いなど）」「書く力の育成（作文など）」と言った指導者の思いや願いが多岐にわたっていることから、国語の中で「話す・聞く」「書く」「読む」「言語等」にこだわることなく「言語能力の育成」として研究を進めていく。その中で、身に付けさせたい力やねらいを明確にした授業づくりを行うとともに、言語活動の充実を図り、児童が自信をもって楽しみながら国語の学習に臨めるようにしたい。

以上のような考えのもとに本研究主題を設定し、思考力・判断力・表現力の基盤となる言語能力の育成に力を注いでいくこととする。ホップ期に進めた研究をもとに、言語活動の工夫をしながら

児童の言語能力と思考力・判断力・表現力を育てていきたい。併せて、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善や教員の指導力向上にもつなげていきたい。

3 主題のとらえ

言語能力とは、相手が話している言葉や書いてある文字を理解したり、言葉を用いて思いや考えを伝えたりするときに必要な力である。現行の学習指導要領第1章総則第3(2)では、「第2の2の(1)に示す言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること。あわせて、(7)に示すとおり読書活動を充実すること。」と規定されている。言語能力の育成を図るためには、国語科の「話す」

「聞く」「書く」「読む」の言語活動の中で、「情報を理解するための力」と「文章や発話により表現するための力」を適切に指導していくことが重要となってくる。それらの活動が行われている時には、自己の内部だけで展開される「考える」という活動も必ず伴って行われているので、そのような「思考力」も言語能力の1つとしてとらえていく必要がある。さらに、「言葉の働きに気付くこと」や「語彙を増やすこと」などの言葉そのものについて指導していくことも児童の言葉の土台を作っていく上で当然重要となってくる。また、人とのコミュニケーションは言語が中心となることから、コミュニケーション力も言語能力の1つとしてとらえていく必要がある。

言語能力の育成のためには、実際に言語を用いて行う言語活動を充実させることが重要である。学習指導要領でも「言語活動の充実」について規定されている。「言語活動」とは、国語科で身に付けた技能をもとに、各教科の目標を実現するための「思考・判断・表現」を伴う「話す」「聞く」「書く」「読む」の活動全般のことである。本校の研究としての言語活動は国語科が中心となるが、児童が国語科で学んだことを他教科でも生かせるように日々の国語科の授業の中で言語活動の充実を図っていきたい。「ねらいを明確にした言語活動」「計画的に位置付けた言語活動」を行うことが言語能力の育成につながるとともに、児童の思考力・判断力・表現力を育むことにつながっていくと考える。決して言語活動そのものが目的とならないように十分留意して授業づくりを行っていききたい。

4 研究の目標（ねらい）

国語科の学習において、育成したい言語能力を具体的に示し、ねらいを明確にした言語活動や計画的に位置付けた言語活動を実践することで、思考力・判断力・表現力を育むための基盤となる言語能力を育成する。

5 研究仮説

育成したい言語能力を明示し、その言語能力を育成するために、ねらいを明確にした言語活動や意図的な言語活動を展開していけば、児童の言葉の力を高めるとともに思考・判断・表現できる児童が育つのではないかと考える。

6 めざす児童像

「自分の思いや考えをもち、具体的に表現したり伝え合ったりすることができる児童」

※めざす児童像については、分科会ごとに授業に合わせて具体的に設定する。

- 例)・自分の思いや考えをもち、相手に話して伝えることができる児童（話す）
- ・自分の思いや考えをもち、相手の話を聞くことができる児童（聞く）
 - ・自分の思いや考えをもち、話し合うことができる児童（話し合う）
 - ・自分の思いや考えをもち、相手に書いて伝えることができる児童（書く）
 - ・自分の思いや考えをもち、言葉に気を付けながら読み取ることができる児童（読む）
 - ・言葉そのものに関心をもち、自分からすすんで調べる児童（言語） など

7 研究の方法

【年度当初の方針】→ 1学期のベースをもとに、児童の言語能力を育成する研究を進めていく。

具体的には…①児童の言語能力を育成するための提案授業する。（ねらいを明確にした言語活動）

②児童の言語能力を育成するための日常的な取り組みを行う。（継続的な言語活動）

③ICTを活用した提案授業をする。（言語能力の育成、ねらいを明確にした言語活動）

①分科会について

- ・分科会は、低学年、中学年、高学年の3分科会とし、分科会ごとに授業づくりをする。

【低学年分科会】 責任者：（青木）

1年担任、2年担任、専科（富永、長谷川）、若草（親川、嶋田）

【中学年分科会】 責任者：（伊東）

3年担任、4年担任、専科（磯垣、石井諒）、若草（野口、和田）

【高学年分科会】 責任者：（川崎）

5年担任、6年担任、専科（芳賀）、若草（川崎、大西）

※各分科会の責任者は分科会ごとに話し合って決める。

- ・分科会は学年会などを利用し、分科会ごとに時間を調整して行う。
- ・事前、事後の授業を行うなど、成果・課題を検証する。

②研究授業、協議会について

- ・低中高の分科会ごとに1回ずつ研究授業を行い、校内研究日に協議を行う。（年3回を予定）

【10月27日→4年】【11月24日→5年】【12月8日→2年】

- ・研究授業は校内研究日当日に行っても、校内研究日前日までに行ってもよい。校内研究日当日に行う場合は、参観者にどのように授業を見てもらうか検討する。校内研究日前日までに行う場合は、授業を動画で撮影し、編集したうえで校内研究日を迎えるようにする。
- ・動画を編集して提案する場合、授業者は1人じゃなくてもよい。
- ・研究授業後、研究協議会を行い、成果と課題を明らかにする。
- ・協議会では研究授業の実施の仕方により変えていく。協議会のもち方や役割分担など、分科会ごとに決める。講師の先生をお願いしていないので、自分たちで協議内容を深めていくようにする。

③研究の進め方（研究授業までの基本的な流れ）

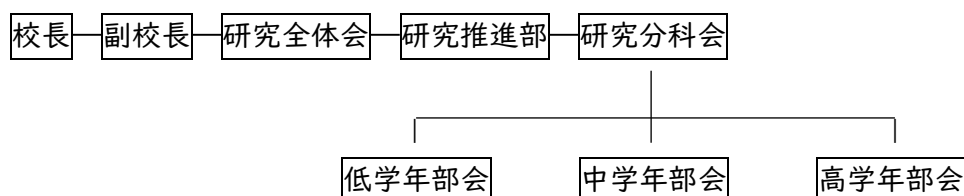
研究授業１ヵ月前まで	教材の決定
研究授業３週間前まで	学年での検討
研究授業２週間前まで	分科会での検討、研究推進部での検討
研究授業前日まで	指導案配布
校内研究日当日	（協議会）

※指導案には必ず「育成したい言語能力」と「その言語能力を育成するために行う言語活動」と「めざす児童像」について具体的に記載する。

④その他

- ・児童の変容を検証するためにアンケート等を活用してもよい。
- ・研究授業に関連する授業をした際は、板書を写真で残しておくといよい。
- ・必要に応じて座席表など活用するといよい。

8 研究組織



9 研究の経過と予定

	校内研究会日時	内容
第一段階	① 4月30日（金）	研究全体会（第１段階の研究の方向性について提案）
	② 5月26日（水）	研究分科会（第１段階）及び全体会
	③ 6月30日（水）	研究分科会（第１段階）及び全体会
第二段階	④ 8月30日（月）	研究分科会（第１段階）及び全体会
	⑤ 9月15日（水）	研究全体会（第２段階の研究の方向性について提案）
	⑥ 10月27日（水）	研究授業①（第４学年）
	⑦ 11月24日（水）	研究授業②（第５学年）
	⑧ 12月8日（水）	研究授業③（第２学年）
	⑨ 2月2日（水）	研究分科会（第１段階＆第２段階：研究のまとめに向けて）
	⑩ 3月2日（水）	研究全体会（研究のまとめ）

